

【技能検定活用事例②】

愛知県立愛知総合工科高等学校

■学校概要

所在地：愛知県名古屋市千種区星が丘山手 107

平成 28 年創立／理工科、機械加工科、機械制御科、電気科、電子情報科、建設科、デザイン工学科
プラス専攻科（2 年制設置）

生徒数約 990 名／進路状況（就職 3 割、進学 6 割、その他 1 割）

公式 HP <https://aichi-te.aichi-c.ed.jp/>

先輩から後輩へ。

技能検定がつなぐ “技” と “志”

技能検定を活用されている学校・企業の技能検定の取り組み状況取材。第 2 回は技術部所属の生徒を中心に毎年、「技能検定」合格者を多数、輩出している愛知県立愛知総合工科高等学校を訪問。機械加工科 長谷川一也先生、「フライス盤 2 級」、「普通旋盤 2 級」にそれぞれ合格した生徒 2 名にお話をうかがいました。

——まずは学校の概要、特色をお願いいたします

長谷川先生 本校は、愛知県立愛知工業高等学校と愛知県立東山高等学校を統合し、平成 28 年に創立されました。愛知県中央に位置し、県内広域から生徒が通学しています。理工系、機械系、電気系、建設系、デザイン系の 5 系列 7 学科を設置。受験時は一括募集で、1 年前期は学科の枠を超えたクラス編成としており、生徒は全系列を学習した上で、後期から希望する学科を選択します。



「ものづくりの現場でリーダーとなり得る人材を育成する」——。これが開校以来の目標です。その実現のため、各学科に部活動として技術部を設置し、生徒が自主的に技能を磨く環境を整えています。

——技能検定を活用するに至った経緯を教えてください

長谷川先生 創立から10年になりますが、前任校時代、高校生が3級を受検できるようになった頃より、技能検定に積極的に取り組んできました。現在も多くの生徒が挑戦しています。令和7年度後期は「機械検査」「機械保全」に52名、「普通旋盤3級」に9名、「シーケンス制御3級」に33名、建設科の生徒6名が「建築大工」を受検しました。部分合格者もありますが、再挑戦する意欲も高く、継続的な挑戦が根づいています。

また、本校では2級に挑戦する生徒もいます。機械技術部顧問の私は、日頃の活動を通して生徒たちのやる気や意欲、技能の高さを実感しています。そこで機械技術部ではものづくりマイスター講座を活用するなど、2級に挑戦できる環境づくりにも取り組んでいます。

——どのような生徒が受検されていますか？

長谷川先生 部活動の時間帯しか練習時間を確保できないため、各学科の技術部の生徒が中心になります。野球部など技術部以外の部活動をしている生徒も受検していますが、受検職種が限定される傾向があり、ほとんどが「機械検査」「機械保全」です。

なお本校では、若手・中堅教員も毎回数名技能検定を受検しています。教員の技能研修の場としても技能検定は非常に有効だと感じています。

——貴校はジュニアマイスター顕彰制度において、認定者数上位校に認定されています。こうした制度は技能検定を受検する原動力になっていますか

長谷川先生 はい、原動力になっていると思います。実際、令和7年度後期は特別表彰が6名です。ゴールド、シルバー、ブロンズを含めると相当な人数になります。技能検定合格で点数を取っている生徒の多くが、ジュニアマイスターを申請しています。

ここからは、技能検定「普通旋盤」「フライス盤」についてお話をうかがいます

——先生自身は、技能検定をどのように評価されていますか？

長谷川先生 課題の難易度設定が実に絶妙で、非常に優れていると感じています。例えば、「普通旋盤3級」「フライス盤3級」は生徒にとって挑戦しやすく、2級になると一段と難易度が上がり、成長を実感できるレベルになっています。段階的に技能を高める仕組みとしても素晴らしいですね。

——生徒のみなさんは技能検定合格のため、どのようなことをしていますか

長谷川先生 技能検定や「若年者ものづくり競技大会」などの大会は希望者が対象のため、これらの対策を授業の中で行うことは難しく、基本的には機械技術部の活動の一環として取り組んでいます。機械技術部では実習室で、朝は7時30分から8時40分、放課後は16時（月・水は17時）から19時まで、実技試験の課題の練習を行っています。さらに土曜日にも活動を実施しています。

部員たちは、技能検定を目指す生徒と大会を目指す生徒に分かれ、互いに刺激を受け合いながら切磋琢磨しています。

私は検定委員のため直接指導はできませんが、他教員やものづくりマイスターの協力を得ています。また、卒業生が休日に指導に来てくれることも大きな支えです。「若年者ものづくり競技大会」入賞者や技能五輪全国大会出場者、さらには旋盤部門の金メダリストもあり、その存在が生徒たちの刺激になっています。

何よりかなり多くの生徒が受検するため、先輩が後輩を指導する体制は必要不可欠であり、伝統として定着しています。

——良いですね。先輩が後輩を育てていくという伝統があるのですね

長谷川先生 機械系学科では、3年生が2年生の教室を毎日交代で訪問し、自身の進路や資格取得の体験談を話す機会を設けています。「自分は将来、こんな仕事に就きたいと思っている。だから、2年生の頃からこの資格取得を目指した」といったような内容です。



——先輩たちの話を聞く経験の積み重ねによって、自然に目的意識が生まれそうです

長谷川先生 そうなんです。早い時期から求人票を見せて、将来像を具体化させることで、目的意識を持った学習へとつなげています。もともと工科高校に入学する生徒は、普通科よりも目的がはっきりしており、1年後期の専門的な勉強に入るとすぐに技能検定を受検する生徒もいます。

ただ、「普通旋盤」の作業には一定の危険も伴うので、安全には十分配慮して練習してもらっています。「機械検査3級」はさほど危険ではないので、実技試験日の数か月前から測定器と部品を実習室の一角に用意しておき、いつでも好きな時に練習できる体制を整えています。学科対策は過去問題を活用し、自主学習を基本としています。

——技能検定の合格前後で生徒のみなさんの変化は？

長谷川先生 大きな自信になっているようです。実技試験の課題は、授業実習より難易度が高いため、合格者は実習に余裕を持って取り組んでいます。作業が早く終われば、戸惑う仲間を自然にサポートする姿も見られます。成長を実感する瞬間です。資格そのもの以上に、目標に向かって集中し努力した経験こそが、将来を支える力になるのだと考えています。

——卒業後の進路はいかがでしょうか

長谷川先生 進学に関しては本校の専攻科に毎年 20 名ほど、その他、工業系や文系の大学、専門学校などさまざまです。

就職する生徒の多くは高校での学びを生かせる企業を選択しています。技能検定などの資格は学校生活で頑張ったことの証として就職活動において一定の評価を得ていると聞いています。

実際に技能検定に合格した生徒 2 名にお話をうかがいます。

Tさん：取材当時、デザイン工学科 3 年。令和 8 年 4 月から専攻科に進学。

デザイン工学科ですが、機械技術部に所属し、技能向上とジュニアマイスターを目指し、積極的に技能検定に挑戦してきました。1 年次の「機械検査 3 級」を皮切りに、「機械保全 3 級」「フライス盤 3 級」「フライス盤 2 級」の計 4 回受検し、合格しました。先輩が技能検定で技能を高めている姿を見て、自分もこうなりたいと思ったことも原動力になりました。

「機械検査 3 級」は学校が用意してくれた練習用セット一式を使い、実技試験 2 カ月前から週 3 回練習し、時間と精度の両方をしっかり上げていきました。

「フライス盤 3 級」は実技試験本番の約 3 カ月前から、毎週 1 つの実技の課題をつくり、自分で検査して問題のあるところを改善するといった作業を繰り返しました。経験豊富な先生方と、ものづくりマイスターの方から高度な技能を教えてもらう機会も何度かありました。自分にはない知識もいろいろ教えてもらったのがよかったです。「フライス盤 2 級」の受検時は、「若年者ものづくり競技大会」のための練習もしていたので両方の指導をしてもらいました。この高校は開校して 10 年。その間にさまざまなノウハウが蓄積されていますし、先輩から後輩へと技能や経験を引き継ぐ仕組みができていることも、私たち生徒にとっては大きな支えになっています。

技能検定の実技試験は課題が複雑なため、製作の手順や段取りの考え方が自然と身につけていきます。また、寸法の精度がシビアなため、どういう工夫が必要なのかという知識も身につきました。驚いたのは、2 級の実技試験の難易度が想像以上に高いことでした。形状や寸法の誤差の許容範囲も厳しく、3 級とは段違いの難しさでした。

学科は、過去問題に加え、試験範囲に縛られずに専門書を読んだり、工具や機械などは、メーカーのホームページで性質をそのつど確認。JIS規格の確認も徹底しました。本質的に理解したかったからです。その甲斐あって「機械保全」以外の学科はどれも満点。勉強したことは実習の場で大いに生きています。専攻科へ進学したら、技能検定の他の職種も受検したいし、合格した職種の上位級にも挑戦したい。就職後もさらに挑戦し自分の技能を高め続けたいです。

〇さん：取材当時、機械加工科2年。令和8年4月から3年生。

機械技術部に入部し、旋盤のグループに入りました。棒状のものを機械で加工していく旋盤が楽しくなり、自分の技能を高めたくて技能検定の「普通旋盤3級」と「普通旋盤2級」に挑戦し、いずれも合格しました。

私も試験の2カ月前からものづくりマイスターの方に教えてもらい、かなり助かりました。合格後は身についた知識と技能を活かし、後輩に教えたりしています。「それよりもこっちの方法がおすすめだよ」と言えたりすると自分でも成長したなと思えてうれしくなります。また、実技試験の時間が長いため、集中力が鍛えられました。

技能検定の学科試験対策としては、過去問題を解きながら、正解のものでもなぜ正解なのかを必ず確認するようにしました。T先輩同様、本質的に理解していかないといくら検定に合格しても実際に身につかないからです。

令和8年4月から3年生になります。そして卒業後は就職を考えています。できれば、鉄道の整備系の会社に入りたいです。そのためにも3年生の間に「機械検査3級」と「機械保全3級」に合格しておきたいと思っていますところ です。



<まとめ～お話をうかがって～>

先生や卒業生が在校生を支え、3年生が自らの経験と技能を後輩へと伝えていく。技能検定を軸に、確かな技能の継承が日常的に行われていました。資格取得を目的化するのではなく、その過程での理解と鍛錬を重視している点が実に印象的です。技能検定はゴールではなく、通過点。挑戦を重ねる中で生まれる自信、集中力、そして後輩へと伝

えていこうとする責任感。それこそが同校が掲げる「ものづくりの現場でリーダーとなり得る人材育成」を体現しているように思えました。

本記事に含まれる文章、画像及びその他のコンテンツに関する著作権は、中央職業能力開発協会に帰属します。無断での転載や加工及び配布はご遠慮ください。

※掲載内容は取材当時（令和8年2月）のものです。